

2019 年度村澤ゼミ卒業論文

有機野菜の購入の決定要因
—JGSS2002 を用いた再検証—

福永 郁実
甲南大学経済学部

概要

本稿では、山本（2007）の先行研究をもとに、JGSS-2002 のデータを用い、新しい変数を加えたうえで、有機野菜を「よく」購入する要因の検証を行う。日常的に購入する人の要因の検証を行うため、「よく」購入する人に限定して検証している。再検証の結果、男女共に年齢、環境配慮意識が高いと、低い人に比べ 30% も多く有機野菜を「よく」購入することが確認できた。男性では保革意識、女性では夕食の用意、幸福度、階層帰属意識、配偶者の学歴で有意な効果が見られ、限界効果は 10% から 20% あることが確認できた。

目次

第1章 はじめに.....	4
第2章 先行研究.....	5
第3章 使用データ.....	6
第4章 分析手法.....	8
第5章 分析結果.....	9
第6章 おわりに.....	11
[参考文献].....	12

第1章 はじめに

本稿では、山本（2007）の先行研究をもとに、JGSS-2002 のデータを用い、新しい変数を加えたうえで、有機野菜を「よく」購入する要因の検証を行う。有機野菜は一般の野菜に比べ価格が2倍から3倍も高い。なので、日常的に購入する人の要因の検証を行うため、「よく」購入する人に限定して検証している。再検証の結果、男女共に年齢、環境配慮意識が高いと、低い人に比べ30%も多く有機野菜を「よく」購入することが確認できた。男性では保革意識、女性では夕食の用意、幸福度、階層帰属意識、配偶者の学歴で有意な効果が見られ、限界効果は10%から20%あることが確認できた。

本稿では、第2章で先行研究の紹介、第3章で使用データの説明、第4章で分析手法の説明、第5章で分析結果を示し、第6章に今後の課題を記載している。

第2章 先行研究

本稿では山本(2007)をもとに研究を行う。山本(2007)では、有機野菜の普及に伴い、有機野菜をよく購入する人を男女別に JGSS-2002 のデータを用い、ロジスティック回帰分析により検証している。男女ともに、環境配慮意識の高い人、高年層、消費者運動グループに所属している人。女性では、大卒、上層ホワイト、下層ホワイト、農林漁業従事者、夕食の用意の頻度が高い、世帯収入が平均より多い、保守的である人。男性では、高卒、上層ホワイト、配偶者あり、近畿または中国・四国に居住、革新的である人が有機野菜をよく購入することが分かっている。

また、新しい変数は竹橋(2011)をもとにしている。竹橋(2011)では、幸福感と環境配慮行動に関連はあるのかを目的に、JGSS-2008 のデータを用い、一元配置分散分析により検証している。階層帰属意識が高い、または、経済的不安の小さいほど、幸福感と環境配慮意識が高いことが分かっている。

第3章 使用データ

データはJGSS-2002を使用する。JGSS-2002の中で今回用いる変数の質問すべての項目に対し、回答した男女2,508ケース(男性1,176人、女性1,318人)を分析に用いた。使用する変数は山本(2007)から、有機野菜の購入、年齢、学歴、職業、配偶者の有無、地域ブロック、市郡規模、夕食の用意、世帯収入、市民運動の参加、保革意識を用いた。竹橋(2011)から幸福度、社会階層、家計、マイバッグの持参を用いる。また、本人だけではなく両親と配偶者の学歴、子供の頃の世帯収入も変数として加えている。

有機野菜(FQ4NOYAK)

よく購入する人を1。その他の回答を0とする。

年齢(AGEB)

20代、30代、40代、50代、60代、70代・80代に分けている。

学歴 (XXLSTSCH) (PPLSTSCH) (MMLSTSCH) (SSLSTSCH)

中学校卒、高校卒、短大・高専卒、大学・大学院卒に分けている。

中学校卒…旧制尋常小学校、旧制高等小学校、新制中学校。

高校卒…旧制中学校・高等女学校、旧制実業学校、新制高校。

短大・高専卒…旧制師範学校、旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校、新制短大・高専。

大学・大学院卒…旧制大学・旧制大学院、新制大学、新制大学院。

結婚(DOMARRY)

既婚(有配偶と離死別)と未婚に分けている。

地域ブロック(BLOCK)

北海道、関東、中部、近畿、中国・四国、九州に分けている。

市郡規模(SIZE)

13大都市、その他の都市、郡部に分けている。

職種 (XXWPL)

農林漁業以外の職業、農林漁業に分けている。

世帯収入(OP5FFINX)

平均よりかなり少ない、平均より少ない、ほぼ平均、平均より多い、平均よりかなり多いに

分けている。

幸福度(OP5HAPPZ)

幸福度のレベルを 5 種類に分けている。

階層帰属意識(OP5LEVK)

上と中の上、中の中、中の下と下の 3 種類に分けている。

市民運動・消費者運動グループ(MEMCIVIL)

参加している人と参加していない人に分けている。

ボランティアグループの参加(MEMVLNTR)

参加している人と参加していない人に分けている。

本人の夕食の用意(FQ 7 CKDNR)

用意する(ほとんど毎日、週に数回、週に 1 回程度)と用意しない(月に 1 回程度、年に数回、年に 1 回程度、全くなし)の回答に分けている。

買い物(FQ7SHOP)

夕食の用意と同じ分け方をしている。

現在の家計の状態(ST5LIFEY)

家計の状態のレベルを 5 種類に分けている。

新聞の購読(FQ5NEWSP)

読む(ほぼ毎日、週数回)、読まない(週 1 回、それ以下、全く読まない)に分けている。

保革意識(OP5RADCA)

保革レベルを 5 種類に分けている。

マイバッグの持参(FQ4BAG)

する(よくする、時々する)、しない(あまりしない、全くしない)に分けている。

15 歳頃の世帯収入(OP5FFIX15)

世帯収入と同じ分け方をしている。

第4章 分析手法

分析手法は山本(2007)と同じロジスティック回帰分析を用いる。ロジスティック回帰分析はある現象(従属変数)が起こる確率を、様々な要因(独立変数)から求めることができる。本稿では従属変数を「有機野菜をよく購入する」とし、ロジスティック回帰分析を行う。ロジスティック回帰分析は統計ソフト「gretl」の制限従属変数のロジットから行った。独立変数はダミー変数を用い基準カテゴリーとの比較を行っている。また、山本(2007)では、全ての変数を累積した結果を扱っているが、本稿では変数ごとの結果で分析を扱う。

第5章 分析結果

分析結果の表から、男女共に、年齢、結婚、新聞の購読、マイバッグの持参、市民運動、ボランティアの参加は影響の確認できた。限界効果は年齢とマイバッグの持参が20%あり、有機野菜をよく購入する大きな要因であることが確認できた。結婚、市民運動、ボランティアの限界効果は10%から20%あり、市民運動とボランティアの参加などの行動している人は有機野菜をよく購入することが確認できた。

男性だけで見ると保革意識が高いほど、有機野菜をよく購入することが確認できた。限界効果では保革意識が低くなるほど有機野菜をよく購入する人が減少していることが確認できた。

女性だけで見ると、幸福度、階層帰属意識、夕食の用意、配偶者の学歴で影響が確認できた。限界効果では、それぞれ10%前後あることが確認できた。また男女共に確認できた消費者運動とボランティアの参加も女性の方が、限界効果が高いことが確認できた。

男女別で再検証を行ったが、女性の方が多く影響の確認することができた。このことは、女性の方が多く食料品の買い物に行くためだと予想される。

表 ロジスティック回帰分析結果

独立変数(基準カテゴリー)		男性		女性	
		限界効果	p 値	限界効果	p 値
年齢(20代)	30代	0.08	0.21	0.02	0.74
	40代	0.19	0.01	0.14	0.02
	50代	0.21	0.00	0.29	0.00
	60代	0.27	0.00	0.34	0.00
	70代以上	0.34	0.00	0.26	0.00
学歴(中学校卒)	高校卒	0.00	0.99	-0.03	0.24
	短大卒	-0.03	0.41	-0.04	0.16
	大学・大学院卒	-0.04	0.11	-0.01	0.65
結婚(未婚)	既婚	0.12	0.00	0.13	0.00
地域ブロック(北海道)	関東	0.00	0.98	0.01	0.80
	中部	-0.02	0.43	0.02	0.58
	近畿	0.03	0.30	0.06	0.19
	中国・四国	0.06	0.14	0.01	0.75
	九州	0.03	0.38	0.02	0.55
サイズ(13大都市)	その他	0.03	0.20	0.01	0.69
	郡部	0.06	0.07	0.01	0.84
職種(その他)	農林漁業	0.00	0.95	0.08	0.23
収入(少ない)	やや少ない	-0.02	0.54	0.01	0.82
	平均	-0.01	0.61	0.02	0.61
	やや多い	-0.02	0.47	0.13	0.01
	多い	0.12	0.18	0.04	0.78
幸福(低い)	やや低い	-0.07	0.28	-0.17	0.02
	平均	-0.01	0.92	-0.21	0.02
	やや高い	0.05	0.53	-0.21	0.04
	高い	0.04	0.60	-0.13	0.18
階層(低い)	平均	0.02	0.64	0.12	0.04
	高い	0.01	0.72	0.15	0.01
消費者(してない)	参加している	0.18	0.00	0.26	0.00
ボランティア(してない)	参加している	0.11	0.00	0.26	0.00
夕食(しない)	する	0.03	0.16	0.10	0.00
買い物(しない)	する	0.01	0.54	0.04	0.26
家計(不満)	やや不満	-0.02	0.44	-0.02	0.51
	平均	-0.01	0.57	0.01	0.77
	やや満足	-0.03	0.36	0.03	0.42
	満足	0.04	0.28	0.07	0.15
新聞(読まない)	読む	0.07	0.00	0.11	0.00
保革(保革1)	保革2	-0.07	0.01	-0.05	0.17
	3	-0.06	0.02	-0.09	0.02
	4	-0.05	0.09	-0.06	0.14
	革新	-0.01	0.77	-0.02	0.68
マイバッグ持たない	あまりしない	0.02	0.29	0.11	0.001
	時々する	0.21	0.00	0.22	0.00
	する	0.29	0.00	0.32	0.00
15歳(少ない)	やや少ない	-0.01	0.87	0.00	0.94
	平均	-0.01	0.74	-0.01	0.20
	やや多い	0.02	0.48	0.05	0.25
	多い	-0.05	0.44	-0.09	0.26
配偶者(中卒)	高卒	0.05	0.01	0.03	0.21
	短大卒	0.06	0.05	0.09	0.08
	大学・大学院卒	0.01	0.73	0.09	0.00
父親(中卒)	高卒	-0.03	0.15	-0.05	0.04
	短大卒	0.08	0.06	0.14	0.00
	大学・大学院卒	-0.05	0.14	-0.05	0.16
母親(中卒)	高卒	-0.02	0.16	-0.03	0.19
	短大卒	-0.02	0.70	0.01	0.78
	大学・大学院卒	-0.03	0.21	0.02	0.81
N		1176		1318	

第6章 おわりに

本稿では、山本（2007）の先行研究をもとに、JGSS-2002 のデータを用い、新しい変数を加えたうえで、有機野菜を「よく」購入する要因の検証を行った。再検証の結果、男女共に年齢、環境配慮意識が高いと、低い人に比べ 30% も多く有機野菜を「よく」購入することが確認できた。男性では保革意識、女性では夕食の用意、幸福度、階層帰属意識、配偶者の学歴で有意な効果が見られ、限界効果は 10% から 20% あることが確認できた。

本稿では 2002 年のデータを使用した。2008 年のデータにも同じ質問があるので、2002 年と 2008 年のデータの比較、新規変数を加えての分析が今後の課題である。

[Acknowledgement]

日本版 **General Social Surveys** (JGSS) は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて (1999-2003 年度)、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである (研究代表: 谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事: 佐藤博樹・岩井紀子、事務局長: 大澤美苗)。東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター SSJ データアーカイブがデータの作成と配布を行っている。

[参考文献]

山本理子, 2007, 「無農薬・有機栽培野菜の購入を規定する要因-JGSS-2002 を用いた分析-」, 『研究論文集 [6] JGSS で見た日本人の意識と行動』.

竹橋 洋毅, 2011, 「幸福感と環境配慮行動の関係性-JGSS-2008 による分析-」, 『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集 [1 1]』.